



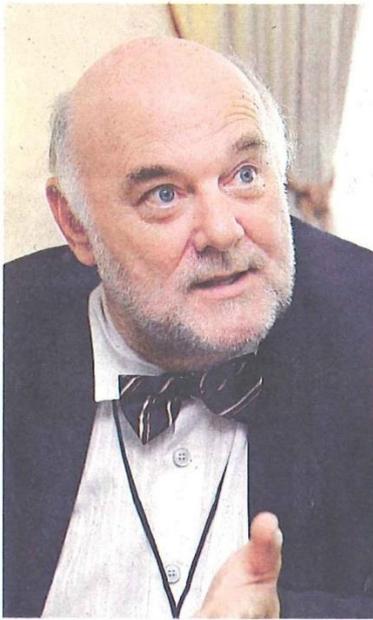
EM・X Goldのパッケージリニューアルにあわせ、EM 研究機構が琉球新報、沖縄タイムスの2誌に全面広告を掲載しました。『「沖縄発」微生物の力世界に』と題し、ドイツ、米国、インドの EM 製造販売会社代表者のインタビューを中心に各国での取り組みが報告されています。

U-net 会員の皆様には、紙面別刷りをU-net 通信新年号に同封しお届けいたします。善循環の会員様でお入りの方は事務局までご一報ください。それでは、皆様良いお年をお迎えください。



EMIKO社(ドイツ)

ヨアヒム・クンツ代表



銀行頭取をしていた1990年代にEMのことを知り、信じられないと驚いた。半分くらい差し引いても素晴らしいと思った。先にEMを取り入れていた米国やコスタリカでの調査結果を聞いて、自分たちも取り入れようと動き始めた。比嘉教授の著書「地球を救う大変革」のドイツ語訳を出版した。感銘を受けた読者から、NGOやNPOでEMを広げる動きが広がった。単なる商品ではなく、地球環境を考える人たちにムーブメントとして受け入れられた。自分のオリジナルな使い方や体験について意見交換をする場も開かれている。当初は市販の化粧品など

動物用も人気

に自分でEMを混ぜて使う人が多かった。最初からEMが入った商品が市場のニーズであり、商品を開発して販売を始めた。今ではクリームや歯磨きなど20種類ほどを作っている。動物用製品が多いのも特徴だ。98年に初めて馬に試験的に使ってみて、いい結果が出た。ドイツでは趣味で馬を飼う人が多く、自分で使つてよかったので馬にもという飼い主も多いようだ。スキンケアのほか、飼料に混ぜたり畜舎にスプレーしたりする。馬のほか牛や犬、猫用など約25種類を販売している。商品開発はまだ初期段階だ。需要を見極めて今後も開発していきたい。



Tera Ganix 社(米国)

ドゥエイン・キング代表



EMを初めて使ったのは、自宅で経営している養鶏場だ。8万羽の鶏から出る悪臭で近所から苦情があり、病気がまん延して死亡率も上がった。EMはインターネットで見つけた。英語での情報が少なかつたので自分で試行錯誤した。臭いはすぐになくなり、1997年からの16年間、鶏への抗生物質をまったく使っていない。2003年から本格的な販売も始めた。EMは発酵するのを待たば増やせて単価も下がるが、米国の消費者は忍耐強くない。しかも農家はとても大規模なので、自分で培養するのは大変だ。培養後のすぐに使えるものをタンクローリーで

養鶏 抗生剤なく16年

運んで販売している。農家の多くは化学肥料一辺倒だ。EMを使つてもうためには、化学肥料を減らしていくに低コストで収量を上げられるかを説明する。そして成果を挙げている農家にだけ販売する。あるスイカ農家は収量が3割も増え、糖度も上がった。他農家は迷わず「自分たちも」と使い出した。有機農法も定着しており、農家は自分なりの方法を確立している。新たにEMを取り入れてもらうのは難しい。客観的なデータを見せるため、大学や農家と協力して従来の方法とEMを使った方法を比較実験している。これが米国の農家を説得するいい方法だ。